北海道教育大学　へき地・小規模校教育研究センター（通称：へき研センター）
Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education (aka HUERISE)
令和４年１月４日発行　第１０２号

へきけんニュース

ホームページ　https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

背景は北海道教育大学釧路校

令和３年度 北海道教育大学釧路校の へき地校体験実習報告会（Ⅰ・Ⅱ）を開催

北海道教育大学へき地教育アドバイザー（釧路校）　荒川　浩一

令和３年度のへき地校体験実習が終了しました。今年度も昨年度に続き、コロナ禍で生じた様々な困難を乗り越えての実習でした。中でも大きな心配を抱えつつも実習の意義をご理解の上、丁寧なご指導をいただいた受け入れ各校及び各市町村教育委員会の皆様に心から感謝申し上げます。

釧路校では、大きく「実習Ⅰ（２年生対象、１週間）」と「実習Ⅱ・Ⅲ（３・４年生対象、２週間）」の２グループが実習を体験します。今年度もすべての実習が終了した１２月に、それぞれの報告会が行われました。これは実習校の特色ある教育活動や、実習の成果・課題を交流するなかで、へき地・小規模校教育の現状理解と実践的な力量を高めることを目的としたものです。

両報告会とも夜分遅い時間から開始したにも関わらず、多くの教職員、学生に参加し、また各実習校の皆様にも Zoom で視聴いただくことができました。

へき地校を体感!　12 月9日(木)
感動の多かった 実習Ⅰ報告会

釧路校では例年新入生がへき地・小規模校で授業を参観するプログラムが実施されますが、昨年度はコロナ禍の影響で十分な研修を実施できませんでした。それもあり、へき地校体験実習Ⅰ（以降「実習Ⅰ」）の参加者である２年生にとって、今回の実習は大変新鮮で感動的な体験であったようです。

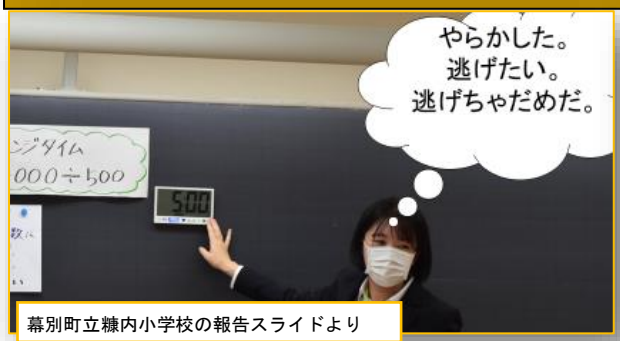
へき地校体験実習Ⅰ協力校／参加学生

町村名	学 校 名	人数
足寄町	螺湾小学校	２名
鹿追町	通明小学校	３名
帯広市	愛国小学校	１名
	清川小学校	２名
	清川中学校	２名
幕別町	糠内小学校	３名
浜中町	浜中中学校	３名
厚岸町	太田小学校	３名
中札内村	上札内小学校	５名
豊頃町	大津小学校	２名
	10 校	２３名

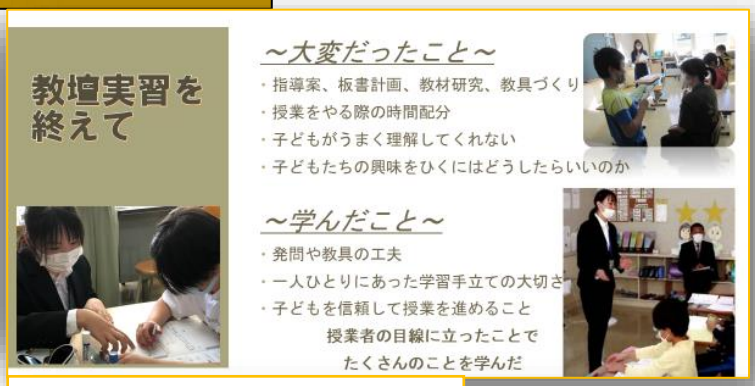
実習Ｉ報告会では１０校、２３名の報告が行われました。実習Ｉは観察実習が中心の１週間という短い期間でしたが、授業や休み時間での子どもたちとの触れ合いや、宿舎生活の様子などを生き生きと伝えました。どの学生、どの実習校でもそれぞれに多くの学びがあり、「今後の学生生活をどのように過ごすかの方向性を見いだした」という言葉が多く聞かれました。

各実習校８分という短い持ち時間でしたが、パワーポイントのスライドを用いて発表した１週間の感動と学びの一部をここでお伝えします。

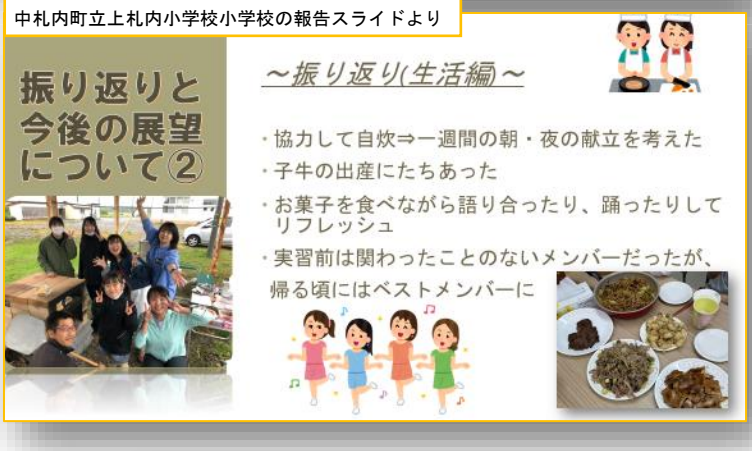
初めての教壇実習　～苦労の先に見えたもの　～



幕別町立糠内小学校の報告スライドより



中札内町立上札内小学校小学校の報告スライドより

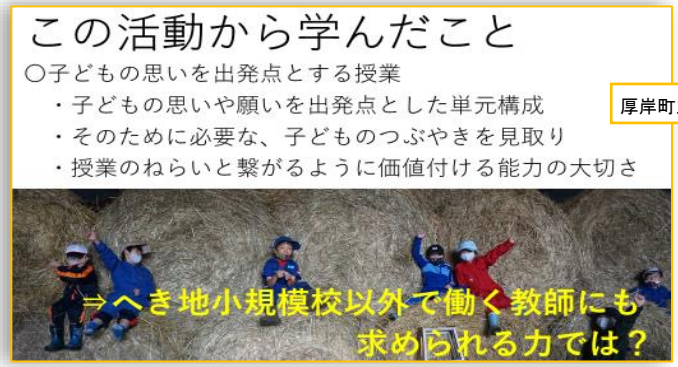


実習Ｉは「観察実習」が基本ですが、教壇実習も経験できた学生もいました。教壇実習を経験したすべての学生がそれを最も貴重な体験と感じたようで、「上手くいかず悔しい思いもしたが、この体験を今後に活かしたい」と力強く述べていたことが印象的でした。また、「虫との戦い？」などへき地ならではの生活など、普段とは違う困難をチームの力で乗り越えられたという報告も多くありました。もちろん学校や地域の強力なサポートに心から感謝していることは言うまでもありません。

大規模校と比較した観点　～不易の発見　～

実習生である２年生は、へき地校体験実習に先立って、あるいはその直後に「教育フィールド研究」や「基礎実習」といった大規模校での観察実習を行います。

厚岸町立太田小学校の報告スライドより



へき地校体験実習ではそうした大規模校での実習と比べた考察も多く聞かれました。それも大規模校と小規模校の違い以上に、共通した教育の基本的な考え方やスキルの発見がほとんどでした。もちろん来年度の主免実習や将来の小規模校における勤務の意欲が高まったという声も聞かれました。

報告会の冒頭、浅利キャンパス長から報告への期待と励ましの言葉をいただき（左上）いつものにこやかな表情で会場をリラックスした雰囲気にしてくれました。

前半の部、感想を述べていただいた鈴木先生からは「落ち着いて堂々と報告していたことを評価いただき、一つ一つの学校の感想についてお話しいただきました（右上）。

後半の感想を述べた小林先生（左下）からは「時間、お金、負担もかかる中で行っただけあってそれなりの成果を持ってきたことは全体を通して伝わった」としながらも、「主体的な学びを促進したいと言うにも関わらずそれが発表の仕方に反映されているとは言えない」と辛口のコメントも。報告会終了後、「小林先生を見返すよう頑張ります！」と何人も語ってくれたことをとても頼もしく思いました。

最後に川前副センター長（右下）がコロナ禍にもかかわらず実施できたことへの感謝の言葉とともに来年度、３、４年生が対象となる実習Ⅱ・Ⅲで今回の学びを生かして欲しいと述べ、２時間にわたる報告会を終了しました。

より深い学び！ 12月16(木)
大きく成長した 実習Ⅱ・Ⅲ報告会

３年生、４年生が対象となるへき地校体験実習Ⅱ・Ⅲ（以降「実習Ⅱ・Ⅲ」）の参加者は１６名。このうち半数の８名は２年生の時に実習Ⅰを経験しています。

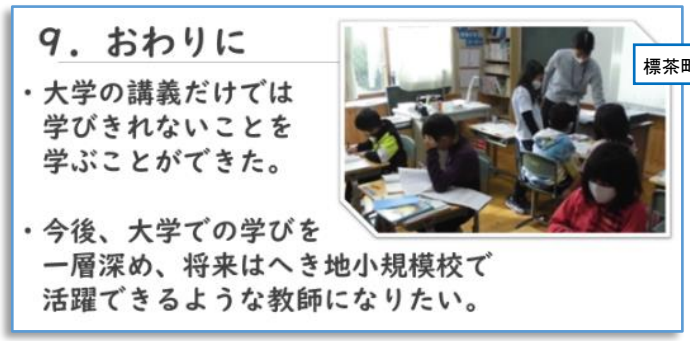
期間も２週間となり、内容も「教壇実習」がメインとなることからより内容が濃いものとなります。

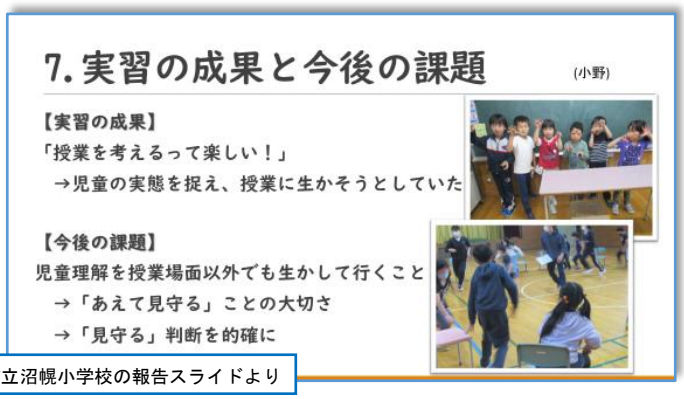
へき地校体験実習Ⅱ・Ⅲ
協力校／参加学生

町村名	学 校 名	学年・人数
標茶町	磯分内小学校	３年生２名
	沼幌小学校	３年生２名
釧路市	山花小学校	３年生２名
釧路町	昆布森小学校	３年生３名
弟子屈町	美留和小学校	３年生１名
別海町	上風連小学校	３年生１名
根室市	花咲港小学校	４年生２名
鶴居村	幌呂小学校	３年生１名
	下幌呂小学校	３年生１名
白糠町	茶路小学校	３年生１名
	１０校	１６名

より高まった教職への意欲

実習Ⅱ・Ⅲ参加者の多くが実習Ⅰを体験していますが、その時の自分との比較を通し、より深く児童理解を進める姿勢や、教師としての接し方まで考えられるようになっている自分を自覚したというようなコメントも多く聞かれました。



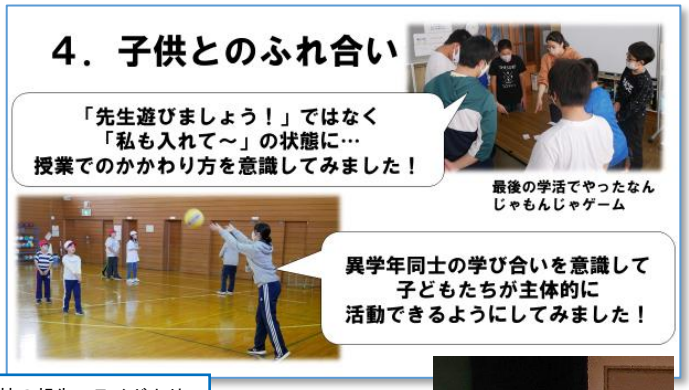


標茶町立沼幌小学校の報告スライドより

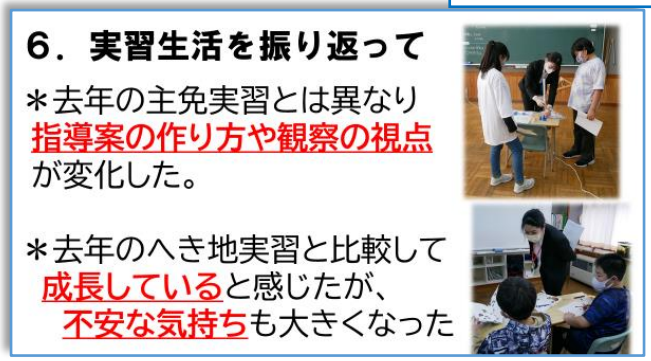
実習Ⅰの参加者同様教職への意欲が高まったことは言うまでもなく、教壇実習で厳しさを経験しても、小規模校での勤務の意欲をさらに示していました。

主免実習に基づく新しい発見も

実習Ⅰの経験の有無にかかわらず、主免実習を終えたばかりということもあり、その比較から多くを学んだというコメントも多くありました。中でも多くの参加者が「主免実習（大規模校）でも一人一人の子どもをよく見て臨機応変に対応することが必要であった」とあらためて振り返っていたことが印象的でした。



根室市立花咲港小学校の報告スライドより



また、上と左のスライドは４年生の報告によるものですが、他の３年生に比べ、より教職に就くことを「自分事」として考えていることが伝わりました。既に採用試験に合格していることもあって、「これからさらに準備しなければならないこと」「課題として改善しなければならないこと」を把握できたことが大きな成果であると語っていました。

ここまで一部のスライドしか紹介することができませんでしたが、教壇実習が中心の活動だっただけに、内容も濃く、プレゼンの方法についても大変落ち着いていました。ただ、時間が１校８分と限られており、どの報告ももっと時間をかけて聞きたいと思わせるものでした。

修了証を手に記念撮影

報告終了後はそれぞれが樹澤へき地校体験実習部会長から修了証受け取りました。

今後もへき地校体験実習の充実を

感想を述べていただいた森先生（左）、吉田先生（右）からはそれぞれ「…この実習を通して、この時点から教職に向けての意欲を見ることができ頼もしく思った」、「…それぞれ動機、目標をしっかり持って実習に参加していることが、学びを深めることにつながった」と講評をいただき、今後に向けての励ましの言葉をいただきました。

鹿児島県からお客様も

**鹿児島県総合教育センターから
３名の研究主事の皆様**

実習Ⅱ・Ⅲの報告会には鹿児島県総合教育センターの研究主事３名の視察訪問をいただきました。川前副センター長から、「鹿児島県はへき地指定校が全国で最も多く、そのへき地学校やへき地性の高い学校のために研修を進めていらっしゃる…」という紹介の後、代表して石川雅仁研究主事からご挨拶をいただきました。石川研究主事からは「報告を聞いて、学校や地域の実態に応じ、様々な教育活動が行われなければならないことが伝わった」とお話しされました。さらに「『子ども一人一人に合った』『子ども理解』などというキーワードが報告の中でたくさん聞かれたように、子どもを中心に考えることがどの学校でも普遍的に必要である」ことをあらためて感じたとのお言葉をいただきました。

最後に川前副センター長から、縁があって鹿児島と北海道が交流することができたことに感謝するとともに、「この日の報告会を含め、これからも縁は自分で作るもので、今後もそうした機会を使って自分の引き出しをたくさん増やしててほしい」との願いを伝え、報告会は終了しました。